

月ヲ食ベタネコ





ある街に、虹色の美しいネコがいた。
その美しさに、みなは褒め称えた。
ネコも自分の美しさに満足していた。

ある月の綺麗な宵闇。
虹色のネコは空を見上げた。
そこには黄色く輝く月がいた。



虹色のネコは小さな嫉妬をした。

もしかしたら自分よりも月の方が
美しいのかも知れない。
いつかみんなは自分より目を

美しいと言うかも知れない。



虹色のネコはみんなに内緒で
こっそりと長い長い梯子を作り始めた。

長い長い梯子は満月の夜に完成した。



虹色のネコは宵闇の空へ向かって
黒くて長い梯子をかけて
満月まで昇っていった。

一番てっぺんまでたどり着くと
虹色のネコはポケットから
ナイフとフォークを出した。

虹色のネコは満月を食べてしまった。



欠けた満月は三日月になっていた。
虹色のネコはそこに座って街を見渡した。
この世界の全部の中で
自分が一番美しいといいなと思った。

虹色のネコは毎日少しずつ
月を食べるようになった。
みなは毎日少しずつ
欠けていく月に気付かなかった。

ある宵闇。
ついにネコは月を全部食べてしまった。

すると先ほどまで明るかった夜空は
真っ暗闇になり、
上も下も右も左も
分からなくなってしまった。

目を失った星たちは迷子になり、

かき合った至るところに、
一つ残らずどこかへ行ってしまった。



真っ暗闇の世界。
何も見えない世界。
虹色のネコは初めて怖いという心を知った。
闇を怖いと思った。
自分の嫉妬を怖いと思った。
梯子にしがみついて一晩中
ブルブル震えたまま。
虹色のネコは夢の中へ溶けていた。

目を覚ますと、朝だった。
虹色のネコは石畳の赤茶色い地面の上で
丸くなっていた。

よかった。生きていた。

虹色のネコは嬉しくなって太陽を見た。
もう、そこに、闇はなかった。

虹色のネコはいつものように
街の中を歩き回る。

けれど、

ワレ、
今日は誰からも話しかけられなかった。

ふと。
自分が映るショウウィンドウをみる。



そこには一匹の真っ黒なネコが映っていた。
虹色のネコは真っ黒なネコになっていた。
それはカラスより真っ黒のネコだった。
もう、誰も。

じつ、誰し。

真っ黒のネコに話しかけるものはいない。

作・絵 兎村彩野

<http://to2kaku.com/>

AYANO USAMURA

1997 -2015 All Rights Reserved.